

令和6年度 卒業論文

日本語における句読法の変遷

広島大学文学部人文学科
日本・中国文学語学コース
日本文学語学専攻
B210859 有馬杏子

目次

1. はじめに	1
2. 先行研究	3
2.1 「句点」に関する先行研究	3
2.2 「句点・感嘆符・疑問符」の文末使用に関する先行研究.....	3
2.3 「文末句点・符号・無標」に関する先行研究.....	4
3. 調査方法	6
3.1 SNS 調査について	6
3.2 アンケート調査について.....	7
4. 考察と調査結果	9
4.1 従来から現代の句読点の用法.....	9
4.2 新たに生じた句読点の用法	11
4.3 SNS での使用傾向について.....	12
4.3.1 SNS 調査について.....	12
4.3.2 LINE 調査について.....	18
4.4 句読点に対する意識について.....	20
5. おわりに	26

1. はじめに

まず、「句読点」の一般的な認識は文章の終わりや意味の区切りを示すものとして使うというものが多いただろう。現代においても学校の資料をはじめ、会社、公的機関で用いられる資料には句読点がある程度の規範のもと使用される。

しかし、昨今の SNS や LINE などのインターネット上で飛び交う文章では句読点が使用される場面を目にする機会が顕著に少ないように感じられる。

なぜ公的な文書では多く使われる句読点が SNS などの自由な場になるとなくなってしまふのか。それらを投稿する人々にはなんらかの句読点に対する印象があり、意図的に使用を避けているのか。または無意識のうちに使用しなくなってきているのか。他にも、句読点のかわりに使われているものにはどのような意図・役割があるのかなどの疑問がある。

そのひとつの答えになりうるものとして、「句読点を使うことで、文意が強調され相手に堅苦しい、怖いなどの印象を与えてしまう」というものがあるのではないか。この仮説を裏付けるものとして昨今メディアによって取り上げられるようになったマルハラスメント（通称マルハラ）という新用語がある。また、句読点を本来の用法以外で使用する（「、、、」、「。。。等）で自分の言いたいことをより豊かに表現し、自己表現の道具として使用するケースもあると考えている。

それらを明らかにするためにも本論文における最終的な目的は、句読点の使用法が現代の SNS において従来のものから変化している証拠や、人々が潜在的に怠っている句読点への認識（ex.冷たい、無機質）を探るところにあると考えている。

このテーマに関して、それらの用法の変化の一例として挙げられるのが代替として広く使用される絵文字である。句読点については既にいくつか先行研究が存在するが本論文で取り扱うテーマは、多少の重複はあるものの先述の通り、人々が句読点に本来の使い方以外でどのような認識を怠っているのか、SNS の文章にて句読点が忌避されがちになっているのにはなにか理由があるのかということについて研究を進めていきたい。

そういったことを明らかにすることで明治、大正時期から現代に移行するときに生じた句読点の用法の変遷と似たような事象、即ち「句読点」そのものへの大衆の大きな認識の変化が現在、SNS などのネット媒体などで生じているのかを具体的な SNS 調査やアンケート調査を実施し、歴史的背景も参考にしながら明らかにしたいと考えている。

本論に移る前に先に述べたマルハラについて軽く説明をする。マルハラとは「マルハラスメント」の略であり、メールや LINE、SNS において文末に句点が付いた文章に対して主に若い世代が不快感や威圧感を覚える傾向をハラスメントに当てはめた造語である。実際のニュース記事では次のように取り挙げられている。

LINE（ライン）など SNS で中高年から送信される「承知しました。」など文末に句点がつくことに対し、若者が恐怖心を抱く「マルハラ（マルハラスメント）」が注目されている。若者は文末にある句点が威圧的に感じ、「(相手が) 怒っているのではな

いか」と解釈してしまう傾向にあるという。専門家は、メールに長く親しんできた中高年と SNS を駆使する若者との間をめぐり、SNS 利用に対する認識の違いが影響していると指摘する。

(文末の句点に恐怖心…若者が感じる「マルハラスメント」 SNS 時代の対処法は、産経新聞、2024-02-06、産経ニュース)

また歌人の俵万智氏も文末句点に着目して SNS 上に、句点を正解を表す「○ (マル)」と解釈して文末に○のつく日本語の美しさを読んだ一首を投稿し多くの反応を得た。そもそも「マルハラ」という言葉が最初に使用された時期を調査したところ、2024 年 2 月 1 日に放送されたインターネット上のニュース番組にて、同番組内で実施された街頭調査から判明した若者世代は文末句点にネガティブな印象をいだきやすいという傾向を「マルハラ」と呼称したことが始まりであることがわかった。その日を皮切りに様々なユーザーやメディアによってマルハラが取り上げられるようになった。

この新用語に対しては SNS 上で賛否両論意見が寄せられており、ある種メディアによるハラスメント議論の扇動に近いものも感じるが、実際若い世代には一定数句点にマイナスな印象をもつ人がいることは間違いないだろう。こういった新しい用語まで普及する区切り符号としての句読点について今回は数種類の調査を行い、実際の使用傾向や印象について明らかにしたいと考えている。

2. 先行研究

2.1 「句点」に関する先行研究

金田拓「文末句点「。」を伴う文は、若年者に距離を感じさせるか？ 日本語打ちことばの研究」『帝京科学大学総合教育センター紀要 総合学術研究』6巻 2023年

金田（2023）は若年世代同士の会話を想定した句点の有無や状況設定の異なる質問を作成し、総勢69名の大学生を対象に「かなり距離感がある(1)～かなり親しみがある(7)」の7段階評価で調査を行った。この文末への句点の付与により若年者がメッセージに距離感を覚えるかという調査において、若年世代は一貫して文末に句点がある応答に距離感を感じるという結果を導き出していた。

またこの結果を受けて「打ちことばにおいて少なくとも受信者は、文末記号のような細部の変化を鋭敏に察知しているということである」（p.24）と推察している。また、他の研究において英語でも同様の印象が句点にもたれているという結果をふまえて以下のように、句点本来の用法が直接印象に影響を及ぼした可能性を考察している。

推測だが、多言語でネガティブな印象が確認されているのは、文末記号が持つ終止という側面が、たとえば対話の打ち切りなど、心的に似通った解釈がなされていることも考えられる。（p.25）

また打ちことばについては、他の話しことばや教育によって規範が明示される書きことばなどのモードとは違って同時性や規範を欠く性質に言及している。そのような打ちことばにおいて句点は「単なるメカニクスとして使われるのではなく、意味を表す文字のように解釈されている」（p.25）と述べている。

そして今後の課題として、句点や「（無標）」以外の感嘆符・疑問符「！・？」や長音符「ー・～」、「笑」との比較研究の必要性を挙げている。

金田の研究では文末句点の印象を明らかにしているが、実際の使用傾向については記述がないため SNS 調査や LINE 調査を用いてく句点使用率の傾向やそれ以外の文末（！・？や「笑」等）の使用傾向についても明らかにしたい。

2.2 「句点・感嘆符・疑問符」の文末使用に関する先行研究

○宮嶋由美「『句点』の文末使用の経年変化—加藤安彦ケータイメールコーパスの整備を通して—」『専修国文』112巻 2023年

宮嶋（2023）は、専修大学文学部日本語日本文学科教授であった故加藤安彦氏によって収集が開始された約10年間（2001年～2010年）の大学生を中心とした「ケータイメール

コーパス」のデータをもとに統計調査を行った。データ提供者による 3 段階の「親密度 1～3（数字が小さいほど親密度が高い）」ごとに文末での狭義での句点「。」、広義での句点「!・?」それぞれの出現割合を調査し、2001 年時点で句点「。」の使用が「親密度 1」にて 24%、「親密度 3」にて 41%、2004 年以降では親密度関係なく 10%以下、2010 年では 5%未満を記録した。「!・?」はおよそ一定の使用頻度を保つ結果となった。この結果について以下のように述べ、句点「。」の規範性の高さが転じて心理的距離の認識要素となり、使用率低迷に影響したのではと考察している。

書きことばの文末表現の規範として使用してきた句点「。」は、その規範意識によって文体的な高さが生まれ、より親密度の低い相手へは文体的な高さを示す記号として付与されたものが、心理的距離を互いに認識させる要素として認識されはじめ、その後の使用頻度の低さにつながっていく要因になっていったのではないかと考える。

(p.12)

また、「!・?」が一定の使用が保ってきた要因として、「強調」や「問いかけ」の機能が優位に認識され、使用媒体が変わっても文体的高さといった変化を発生させることなく、一定の使用を保ってきた」(p.12)としている。ここでの「文体的高さ」とは文末表現としての句点の使用規範がもたらすかまいった印象を指すと考える。このことから広義にそれら感嘆符・疑問符を句点と分類しても本質的な使われ方では句点とは全く違うと考えられる。

宮寄（2023）が簡易的に行った LINE での文末句点の印象調査では「丁寧な感じ」がするものの「冷たい感じ」を受けるものとして認識される傾向」（p.13）がみられ、この結果について句点に「語用論的標識を備えつつある記号となってきた一端」（p.13）を見出している。

宮寄は以上のような LINE 調査を行ったとしているが詳細な結果は明記されていないため、今回行う調査にて実際の句点の使用率や感嘆符、疑問符は句点の使用と比べて多いのかなどを明らかにしたい。

2.3 「文末句点・符号・無標」に関する先行研究

○岩崎拓也、市江愛、井上雄太「チャットにおける符号使用の印象評価のための予備的分析」『言語資源ワークショップ発表論文集』1 巻、2024 年

岩崎（2024）は「符号なし」「句点」「感嘆符」を分析対象として LINE を想定したいくつかの状況設定の質問を作成し、クラウドソーシングを用いて自由記述形式で年齢性別を問わない 274 名分のデータを収集した。その結果、感嘆符に関しては「感嘆符を使用した

場合、ポジティブな印象を持つ人が多い」(p.439)という結果が得られ、句点は「発話末の符号が句点であっても必ずしも違和感を感じるわけではない」(p.440)との結果が示された。また、それぞれに寄せられたネガティブな印象について次のように述べ、感嘆符と符号なしを使うとマイナスの印象を与えにくいことを示している。

最後に、ネガティブな印象を見てみると、【素っ気ない】が全ての結果において見られた。また、符号なしと句点においては、【無】 - 【愛想】と【冷たい】が、句点と感嘆符においては【怒る】 - 【居る】が共通して見られた。これらの結果を考えた場合、感嘆符を使用した場合、無愛想や冷たさを感じることはなく、符号なしの場合には怒っている印象がないということが言える。(p.440)

最後に句点「。」はネガティブとポジティブどちらの印象も与えることと、符号なし・感嘆符に寄せられた「特に違和感のない」「普通の表現」という回答を受けて、「句点だけが特別な印象を与えているわけではない」と結論付けた。

これらのことから文末につける句点や感嘆符、それ以外のもの及び符号なし（無標）にはすべて何らかの役割が付加されていることがわかり、打ちことばが情報共有の主流となっている現代においてコミュニケーション手段として非常に重要な部分であることを示しているといえる。

岩崎らの研究によって「符号なし」「句点」「感嘆符」にある程度の印象変化があることがわかっているが結論が少々曖昧であったり年齢での回答の違いが不明であったりするため SNS 調査やアンケート調査、LINE 調査を通して実際の使用傾向を掴み、そこから明確な印象変化を発見したい。

3. 調査方法

3.1 SNS 調査について

調査方法は大きく二つある。

まず一つ目が、X（旧 Twitter、以後「X」と呼称）を用いた SNS 上での句読点やその他のもの（ex.絵文字、顔文字、感嘆符）の使用実態の計数調査だ。現在 X や Instagram、Threads、Face book をはじめとして多くの種類の SNS が使用可能な状態である。そのなかでも今回調査するにあたって X を選択した理由は、他の SNS に比べて長文での投稿がしやすいことに加えて、サービス開始時期も 2008 年と歴史が長いことからインターネットが広く大衆に普及し始めてから現在までの変化の観測が期待できると考えたからである。

方法は、サービス開始の 2008 年から現在までに投稿された文章を X の「高度な検索」機能を使用して各年 25 個ずつ抽出したのちに Google Colab と Word で解析し、Excel にて集計する。調査項目は、「一投稿あたりの文字数、句読点の使用数、その他の使用数」、「一投稿内での文末の回数」、「文末が句点以外で締められた回数」である。また、なるべく偏りの無いように抽出する方法については「高度な検索」機能において、次のようなコマンド「since:2008-07-01 until:2008-08-01」を入力して検索することでその期間内（先のコマンドでは 2008 年 7 月 1 日から同年 8 月 1 日まで）に投稿された文章のみを表示させることができる。その表示されたものを上から順に一定投稿数ずつ調査するという方法を採用する。また数投稿調査するごとにこまめに月を変更することでも偏りを少なくする。調査項目の用語について、「その他」が含むものは感嘆符・疑問符「!・?・!!・??等」・長音符「一・～」・絵文字・顔文字・3点リーダー「…」・「笑」・括弧類・その他の記号「♪・&等」としている。また、感嘆符を句点として扱わない理由について、宮寄（2023）の先行研究でも述べられたように感嘆符は文の強調や疑問の表現としての役割が重視されており、実際の使用例では句点の「文を区切る、文の終止を示す」という性質と乖離があると考えたためである。

解析した結果について、それぞれ百分率に換算して一投稿内での使用数の変化を観察する。また X 上の文章だけでは日常会話を観察できないため、本論文著者が実際にやりとりした LINE の文章をいくつかとりあげて同じような計測を行うこととする。やはり SNS の文章は誰かと会話して発されたものより、俗にいう「つぶやき」として単体で投稿されるものが多い。それらを見て一概に「現代人の句読点の使用に変化があった」などと論じるのは難しい。そのため会話上での変化という観点の比較対象、または補足情報として LINE を活用する。詳細な調査方法として 15 人分の個人トーク履歴を用い、相手から送られてきた直近の LINE 各 20 個合計 300 個を対象として文末の数と文末での句点の有無、そしてその他のものの使用について集計する。

それぞれの調査対象について、SNS 調査ではサービス開始の 2008 年から 2024 年現在までの投稿を各年 25 個、合計 425 個を抽出して行う。またある程度の文章の長さがほしいため 50 文字以上の投稿に限定する。ただし、投稿を選択する際に人間の操作を必要

とせず自動的に投稿を行う通称 bot とみられるアカウントによる投稿は除外する。

また今回は文章を書くうえでの句読点の使用傾向を見るためにも 50 文字以上の文章を解析対象としているが、逆にそれ 50 文字未満の短文投稿では文末はどうなっているのかも疑問を抱いた。そのため 50 文字以上の抽出方法と同じように短文投稿も各年 50 投稿収集し、そのなかで文末が句点以外の投稿の数を計数し百分率で表すこととした。LINE での会話文調査については 20~80 代の男女 20 名を対象としている。また LINE において文字数が 50 字を超えることはほとんどないため、文字数制限等は設けないものとする。

3.2 アンケート調査について

二つ目は、アンケートによる調査だ。不特定多数の人にご協力いただいた結果を集計して、そこからみえてくる特徴について考察を行う。

アンケートは、実際のメールまたは LINE の文章を模したものを読んで印象を回答するもの、句点で締められる文章への印象を選択形式で問うもの、句点の使用頻度等を問うものの合計 10 問で構成されている。実際のアンケート文章を次に掲載する。

句読点の認識に関するアンケート

年齢 (短文回答)

【1】文章中尾の句読点の多少、有無での印象の変化を問う問題です。

1.1 サークルの団長から次のような文章が送られてきたと仮定します。

内容が同じである 3 つの文章それぞれへのご自身の直感的な印象を 5 段階

(1: やわらかい、2: やややわらかい 3: どちらともいえない 4: ややかたい、5: かたい) の選択肢から選んでください。

- ① 明日の午前 10 時より、第 3 会議室にてミーティングを行います。
持ち物はパソコン、筆記用具、事前配布資料です。
遅れないように来てください。
- ② 明日の午前 10 時より、第 3 会議室にてミーティングを行います。
持ち物はパソコン、筆記用具、事前配布資料です。
遅れないように来てください
- ③ 明日の午前 10 時より、第 3 会議室にてミーティングを行います
持ち物はパソコン、筆記用具、事前配布資料です、
遅れないように来てください

1.2 友人から次のようなメッセージが送られてきました。

内容が同じである 3 つの文章それぞれへのご自身の直感的な印象を 5 段階の選択肢 (【1】

1.1 と同じ) から選んでください。

- ① 頼まれてたやつポストに入れといたから。後で確認しとって。
- ② 頼まれてたやつポストに入れといたから後で確認しとって。
- ③ 頼まれてたやつポストに入れといたから後で確認しとって

【2】簡単な4つの質問にお答えください。

「句読点の多少、有無での印象の変化」と「句読点の代替としての絵文字や感嘆符（！、？）、「笑」、長音符「ー」等の使用への許容度」についての質問です。

- ① 主にメールやLINE、SNSのDM上での会話における文末が句点「。」で締められた文章に対して、どのような印象を抱きますか。最も近い印象を選択してください（複数選択可）。
※アンケート冒頭設問の例文のような実際の状況を想定してお答えください
かたい つめたい やわらかい 明るい
どちらかといえばプラスの印象 どちらかといえばマイナスの印象
その他（短文筆記形式）
- ② あなたはメールやLINE、DM等においてどの程度文末に句点「。」を付しますか？5段階の選択肢（1：全く使わない、2：あまり使わない、3：どちらともいえない、4：まあまあ使う、5：よく使う）から選んでください。
※なお、メール等において目上のひとに送信する場合を除くものとする
- ③ あなたはメールやLINE、DM等において、絵文字や感嘆符「！、？」、「笑」、長音符「ー」をどの程度使用しますか。
5段階の選択肢（【2】②と同じ）から選んでください。
- ④ 文末に句点「。」を付さないこと、または上の③であげたようなそれ以外のものを付すことに抵抗があるかどうか5段階の選択肢（1：全くない、2：あまりない、3：どちらともいえない、4：まあまあある、5：とてもある）から選んでください。

調査対象は、特に年代や性別等の制限は設けず日常的に日本語を使用する機会のある日本語話者を対象としている。今回の有効回答数は51回答である。

参照のしやすさを考慮してSNSとLINE調査の結果は「4.3 SNSでの使用傾向について」に、アンケート調査結果は「4.4 句読点に対する意識について」のなかで考察と合わせて掲載する。

4. 考察

4.1 従来から現代の句読点の用法

まず、本論文で句読点を扱うにおいて確認しておきたいのが現代における「句読点」の定義である。それについて、日本国語大辞典から引用したものを以下に記載する（中略は本卒業論文筆者による）。

1. く-てん【句点】

〔名〕漢文を読むとき、句の切れ目などにつける符号。また、文章を書くとき、文の切れ目につける符号。特に現在では、文の最後の字の右下に小さく添える中白の点。「。」（中略）

2. とう-てん【読点】

〔名〕（1）文章の切れ・続きを明らかにするために、文の中の意味の切れ目につける符号。普通「、」を用いる。（2）（1）の点を打つこと。句点を切ること。（中略）

3. くとう-てん【句読点】

〔名〕書かれた文章につき、また、文章を書くについて、意味の切れ目を明らかにするために用いる補助記号。句点と読点。

まとめると、ここでの「句読点」の定義は次のとおりだ。

- 1) 文の切れ目を示すものが「句点」
- 2) 語句の切れ目を示すものが「読点」
- 3) 上記の二つを総称するものが「句読点」

文化庁文化審議会国語分科会の『新しい「公用文作成の要領」にむけて（報告）』では句読点について次のように書かれている（中略は本卒業論文著者による）。

長い文は、句点や接続詞を使い、また長い修飾語・修飾節を別文に移すなどして複数の文に区切る。（中略）読点をどこに打つかによって、文の意味が変わることがある。意図する意味で読み手に伝わるよう読点を打つ位置に留意するとともに、必要な場合には文を書き換える。

また句読点の他の用法として挙げられるものに、本の帯や広告のキャッチコピーがある。それらでは単語や文意の強調のために文末や語末に「句点」を打つものも多い。そのような使用がみられるのは「句点」で文末句点が文意の強調の役割を担うという意識が広く存在し、現代のSNSにおいても同じような理由で使用が低迷しているのではないかと考える。この「句読点」に対する無意識の先入観については、本論文の主題ともいえる「現代における句読点の用法」についても深くかかわっているだろう。

続いて従来からの「句読点」の用法の話をする前に、古文における地の文や人物による発言の区切り、文末表現がどのようなものだったかについて述べる。

まず、現在でいうところの「句点」が使用される位置、即ち文の後ろを示す部分についてである。古文では既知の通り現代語同様、「未然/連用/終止/連体/已然/命令」という活用があり、おもに句点がなかった近世以前の文章では活用語の「終止形」をもって文末という位置づけがなされていた。他にも係り結びにより已然形や連体形で文が締められたりそれ以外の助詞や助動詞などの活用語の終止形等が文末にきたりなどある。

またそのほか日本語において区切りの役割を持った例として中世から近代にかけて使用のあった候文がある。この候文に関して矢田(1999)は、日本語に即した文字言語としての機能性を追求した特質がみられ、文末・句末に「候」字を多用することにより句読点的な機能を付与させている、としている

では、日本語の表記に大きな変化をもたらすことになる「句読点」がいつから登場するようになったのか。大類(1979)は著書『句読点活用字典』にて次のように述べている。

慶長梓行の『日本書紀』に、朱で句点と読点が用いられているのが最初と言われ、疑問符や感嘆符などは蘭学研究の際に輸入したものである。

しかし、この時点に日本で一般的に「句読点」が使われていたわけではない。句読点が広く大衆にも使われ始めたのは明治時代近辺であり、その認識が広まる一因が1853年のペリー来航による日本開国に在ると考える。その事を契機に日本人に広く洋書が普及し、「句読点」という概念が広まっていったのではないかと考える。実際の当時の人々の西洋語学習について岡田(2010)は次のように述べており、安政期から人々に洋書が流布していったことが推測できる。

日本における西洋語の文法は、中野柳圃のオランダ語研究に始まり、安政期のGrammatica(マートシカッペイ版)によって日本中に広まった。この蘭文法を基本にして、明治期の英・独・仏語学習が始まる。

その後の句読点の普及については、坂井(2018)が自身の論文にて次のように述べている(中略は本卒業論文著者による)。

明治20年代から徐々に現行の句読法へ移行するようになる。(中略)教科書では明治17年『読方入門』が初めて〈、〉と〈。〉を使い分ける句読法を用い、明治30年代以降はほとんどがこの形をとったのに対し、公文書の文部省年報では基本的に句読点を用いず、昭和15年度版から〈、〉と〈。〉を使い分けるようになる。雑誌の状況はその中間的で、概ね明治20~25年の間に使い分けが定着した。

ここで述べられていることについてまとめると、

- 1) 明治 17 年『読法入門』にて初めて「句読点」の使い分け
- 2) 明治 20 年代 → 現行の句読法へと移行
- 3) 明治 20~25 年、雑誌において使い分けが定着
- 4) 昭和 15 年度版～の文部省年報にて「句読点」の使い分けとなる。

また、それ以降の句読点に関する情報について飛田(2002)は自身の著書の中で様々な文献における句読法を比較し検討を重ねながら「明治三十九年には、文部大臣官房図書課の『句読法』案によって、
、と。の使い分け表示法が、国定教科書の標準とされた」としている。日本の公的な文書で句読法の規範が示されたのはこの文部大臣官房図書課の句読法案であり、それによる教育上での句読法の普及は日本全体へ大きな影響をもたらすものだったと考えられる。しかし句読法案が出されたのは明治 39 年であるのに対して、坂井(2018)によると文部省年報は昭和 15 年度版から句点と読点の使い分けを始めたとされている。同じ公的機関であるにもかかわらず句読法制定と公文書での句読点使用が同時進行ではなかったことに疑念が残る。

以上にのべてきたことをふまえると、句読点のない状態の日本語が諸外国（主に開国後の西洋）の影響を受けて¹、教育や政府の方針の転換を行いながら現在の標準的な「句読点」の用法が定められてきたことがわかる。

4. 2 新たに生じた句読点の用法

次に句読点が公的な文書と SNS 双方でどのように使用されているかについて述べる。

昨今の X や Instagram、LINE、Threads をはじめとした多くの SNS では句読点を目にする機会が少なく、その代用として絵文字や鉤括弧、スラッシュ (/)、改行等が使われている場合が多い。他にも文の終わりに句点を打つ代わりに疑問符や感嘆符、なかには句点や読点を「。。。」や「、、、」のように使用し意見や文意を断定せずに対話継続の意思表示として使用するといった方法も見られる。似たような意味を持って使用される記号に 3 点リーダー「…」がある。

ただ公的な文書ではある程度の規範に則った句読点の使用がなされており、文化庁文化審議会国語分科会の『新しい「公用文作成の要領」にむけて（報告）』では「句読点」に関して次のように書かれている。

¹ 世界史的な側面で見れば駒田登紀子氏が自身の論文の中で「句読点」の歴史について言及し、最古の「句読点」の歴史はアリストテレスの『修辞学』だが現在の用法とは違って、呼吸法を示すものであった。しかし、ルネサンス期に「印刷技術」と「黙読の一般化」が発達する。そして十八世紀ごろ、「句読点」は、息継ぎに並んで、視覚的補助の文法的側面を獲得した、としている。

ア 句点には「。」読点には「、」を用いる。横書きでは、読点に「,」を用いてもよい新句点には「。」(マル)、読点には「,」(テン)を用いることを原則とするが、横書きでは事情に応じて「,」(コンマ)を用いることもできる。ただし、両者が混在しないよう留意する。学術的・専門的に必要な場合等を除いて、句点に「.」(ピリオド)は用いない。欧文では「,」と「.」を用いる。

一方、本論文で注目するのは SNS が情報交換・収集の手段の第一線にでてきたことで文章に口語的役割が付加された現代において、句読点の使われ方がどのように変化しているのかという部分である。実際の調査を行った結果を次の章から記述する。

4.3 SNS 上での使用傾向について

4.3.1 SNS 調査について

SNS は主流な情報共有の場として世界中で使用される。昨今ではより長い文章を投稿することが可能となってきた。しかしその特性上いかに既定の文字数の中で相手に伝えたいことを表現するということと、逆も然り短い文章で相手の目に留まる印象を作り出せるかが重要になっていると考える。たくさん書きたい場合は何かを削って文字を詰める必要があり、短い文章の場合は個性を出したり、流れるタイムラインの中で目立ったりする必要がある。また単純に短文で多く投稿するにあたって、一つひとつの投稿に句読点を打つ必要自体が失われてきたということもあるだろう。

今回 SNS での文章の特徴を取り扱うにあたって共通認識を持っていたい用語のひとつが「打ちことば」である。書きことばや話ことばはしばしば国語の授業など教育の場で耳にすることができる。

インターネットでの情報共有が主流となってきた現代において声を発することで成り立つ「話しことば」と、ある程度の規範を以て文字を書くことで成り立つ「書きことば」に加え、文字を打つことで成り立つ「打ちことば」という新しい分類が生まれた。これについて文化庁は文化審議会国語分科会の「分かり合うための言語コミュニケーション（報告）」にて次のように述べている（中略は本卒業論文筆者による）。

電子メールや SNS（中略）などのテキストのやり取りは、文字に表すという点では書き言葉に入る。しかし、互いのやり取りが比較的短い時間で行われ、一回のやり取りで交わされる情報量も少ない媒体においては、話し言葉に近いものも多く用いられる。こうした、話し言葉の要素を多く含む新しい書き言葉を、本報告では「打ち言葉」と呼ぶ。「打ち言葉」は、主にインターネットを介しキーを打つなどして伝え合う、かつてはなかった新しいコミュニケーションの形である。

また本論文冒頭でふれたように近年様々な報道媒体にて、主に先輩や上司から送られてくる句点のついたメールや LINE の文章に威圧感を覚えるという「マルハラメント」通称「マルハラ」という言葉が使われ始めた。そういった言葉が多方面から発信され始めたことは確実に時代の流れとともに句読点の認識が変わっている証拠だろう。

では実際に句読点の使用は減っているのか、経年変化は見られるのかということ进行调查するために幅広い人々の発信がみられる SNS 調査を行った。方法、対象等は前述のとおりである。

次の図は各年 50 文字以上の投稿を収集し、文末が句点以外で締められる割合（一投稿内での文末の数/文末が句点以外の回数*100）と 100 字換算した一投稿あたりのその他の使用数（その他の使用数/文字数*100）の各年次平均を表したものである。図内ではそれぞれ名称が長いので、「50 文字以上の投稿文のなかで文末が句点以外で締められる割合平均」＝「A」、「100 字換算した一投稿あたりのその他の使用割合平均」＝「B」と置き換えている。

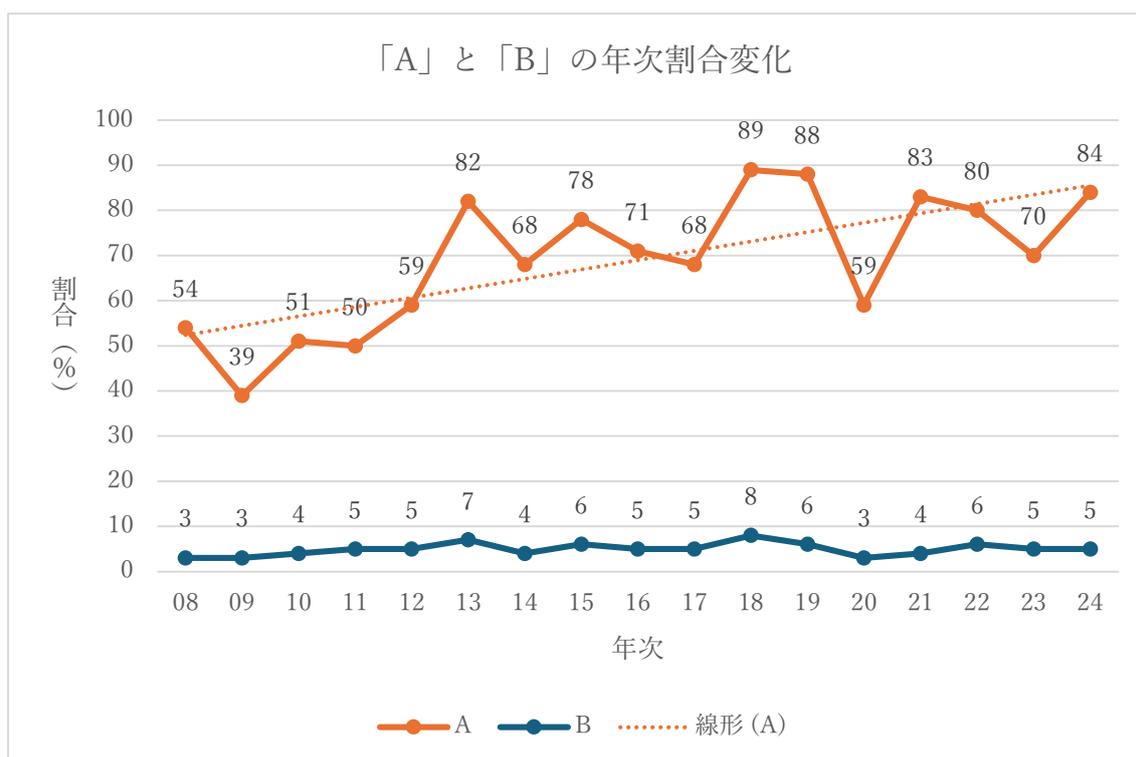


図1 「A」と「B」の年次変化

まず、文末が句点以外で締められる割合については多少のばらつきはあるものの年々増加しているという結果が得られた。その一方で、一投稿あたりの絵文字等の句読点以外の使用率には全年次を通して大きな変化は見られなかった。しかし通年ほとんど変化は見られないものの 2013 年や 2018 年、2020 年のような「A」の値が近似曲線から大きく外れる

年では B の値も若干連動して増減している。

次の図は 50 文字未満の投稿を各年 50 個ずつ収集し、そのなかで文末が句点以外だった投稿の割合（文末が句点以外の投稿数/50 投稿*100）を示したものである。また、先の図 1 同様に図内では「50 文字未満の投稿 50 個当たりの文末が句点以外の投稿の割合」＝「C」と表記している。

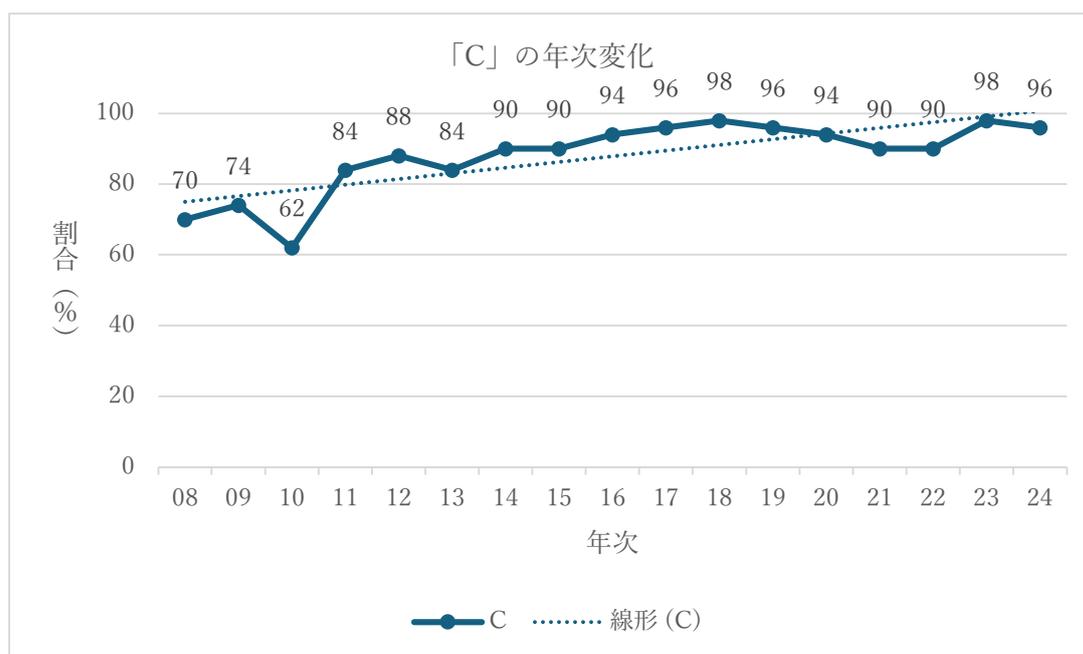


図2 「C」の年次変化

X サービス開始初期の数年こそ割合は高くなかったものの年々緩やかな増加傾向を見せており、9割に落ち着くという結果になった。また、サービス開始初期を調査していたときは50文字以上の長い投稿がかなり少なく短文投稿が多くみられ、年を追うごとに長い文章を見つけやすくなったように見受けられた。にもかかわらず文末が句点以外の割合が小さい理由を下での考察課題とする。

また、Xでの計数を行う過程でわかったこととして、一投稿内での句点、読点の使用率平均は全年次を通して1~2%に収まっていた。しかし各年50文字以上の投稿を25個ずつ収集した中では句点を一度も使用しない投稿の数は年を追うごとに増加し、初期年次と後期では約3倍の差がついていた。読点には大きな変化は見られなかった。

ここからは図1の結果について記述する。年ごとの振幅はあるものの一投稿内での文末が句点以外で締められる割合平均「A」は上昇していることがわかる。実際の投稿文では複数の文章を記述する際でも句点を用いるケースは少なく、感嘆符や絵文字、3点リーダーや改行で区切ったものがほとんどだったが、中には文と文の間にスペースを一つ打つことで区切るものもあった。LINEを含むSNSが広く普及し文字で伝える機会とその頻度

が格段に増えたことで文章での口語的な感情表現の必要性が増したのだろう。そして、それによって句点で締めてしまうよりも、あえて無標にしたり文章間もスペースで区切ったり、あるいは「…」を用いたりすることでより明確な感情表現を行っているのだろう。例えば、相手から送られてきた意見に対して「そう思うけど」と「そう思うけど…」と表記するのでは後者には文章に含みがあるように感じられ、受ける印象が変わる。つまり話しことばで相手の表情や声色などから得られる情報を先のような方法で打ちことばに付与していると考えられる。

話を図1に戻すと、図1内で示される一投稿内での文末が句点以外で締められる割合「A」が増えてもその他の割合「B」が比例しない理由は、調査を行った2008年から2024年の一投稿内での文末の回数は平均して3回前後に収まっており、その中でその他の使用が増減しても大きな変化にはならないためである。

因みに、文末が句点以外だった回数のうち前述のような何もついていない無標のケースとその他のもので締められるケースのどちらが多いのかを調べた。求め方は、一投稿内での文末が句点で締められなかった回数のうちそれが空白ではなくその他だった割合（計算式：文末が句点以外の回数/文末がその他の回数*100）を0%、1%以上50%未満、50%以上100%未満、100%の四つの基準で分けて計数した。またさらに基準となる母数も年によって異なるため百分率で表した。その結果が次の表のとおりである。

表1 文末句点なしのうち「その他」がついていた割合

	08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16
0	53%	43%	10%	11%	12%	13%	13%	8%	24%
1<=, <50	0%	7%	0%	0%	6%	4%	13%	17%	0%
50<=, <100	5%	7%	20%	22%	6%	13%	4%	13%	19%
100	42%	43%	70%	67%	76%	71%	70%	63%	57%
	'17	'18	'19	'20	'21	'22	'23	'24	
0	19%	4%	8%	22%	5%	22%	29%	17%	
1<=, <50	10%	4%	4%	6%	14%	4%	10%	0%	
50<=, <100	10%	13%	13%	17%	9%	9%	5%	25%	
100	62%	78%	75%	56%	73%	65%	57%	58%	

調査開始から2年間の2008年と2009年では0%と100%が約5割ずつであったのに対してそれ以降0%代は低下し全年次通して2割前後となった。また100%代は6割前後だった。この場合0%、1%以上50%未満の値が大きいほど文末が空白の割合が大きいことになるが前述のとおり2割程度に落ち着いており、割合が大きいとは言えない。しかし全年次でほぼ大差ないということは何も文末に付さない無標はある程度文章の印象を決めるうえで必須の選択肢ということだ。また、その分感嘆符をはじめとした絵文字や顔文字の使

用率は安定している。他にも、読点で文を締めるものもいくつかあった。

文章上での感情表現を補完する役割として絵文字や感嘆符は非常に重宝されており、無標についても何かしらの役割があるものと考えられる。後に詳しく紹介する LINE の会話文調査の結果からも文末に句点も何も付さないケースはかなり多くみられたためそちらで併せて詳しい考察を記述する。

また同じく図 1 の「B」について、これは前提として各年次全体の平均を見て推測しているものである。平均となると必ず 0%や高い値などに結果が引っ張られてしまう。それを避けた結果を見るために各年 100 字あたりのその他の割合が 0%、1%以上 5%未満、5%以上 10%未満、10%以上に区分してそれぞれの個数を計数した。全年次分を図に起こすと煩雑になってしまうため、'08-'11 年、'12-'15 年、'16-'19 年、'20-'24 年の四つの時期に分けて平均を出したものが次の図 3 である。

'08-'11 年代では 0%と 1%以上 5%未満の二つの項目で他年次よりも高い結果となった。'12-'15 年代には波形が逆になっている。残り二つの年代においても各図の頂点が初年代よりも一段階右に移動している。そのため、変化自体は小さいものの割合ごとに使用率を見ると年代が新しくなったほうが「その他」を多く使う投稿の割合は大きくなっており、使用数は増えていることがわかった。

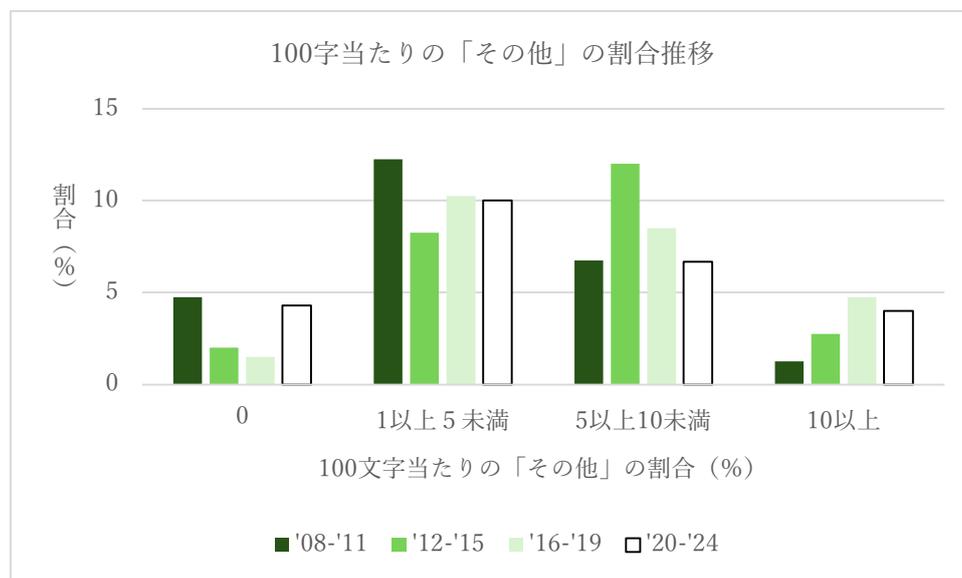


図 3 100 字当たりの「その他」の割合推移

次に、X での SNS 調査を始めた当初目立っていた特徴として、50~100 文字を超える投稿自体が少ないことが挙げられる。即ち短文での投稿が多かったというわけだが実際の結果ではそれ以降の世代よりも文末が句点以外で締められる割合が低い。個別に投稿の解析結果を見ても 2008 年から 2011 年ではほぼすべての投稿に句点がみられる一方でそれ以降の年次の投稿ではこの章の始めに記述した通り全く句点がない投稿が増え、一部の句点を

多く含む投稿によって平均が引き上げられている状態となっている。

サービス開始初期の投稿にそのような特徴が表れている理由として、人々の SNS 慣れが考えられる。初期にはインターネットに何かを投稿する環境に不慣れであり整った文章を書いていたものが、その環境の中で多くの人と繋がるうちに砕けた文章での投稿が増えていき現在の句読点の使用頻度に近づいていったのだろう。図 1 の「A」では 50 文字以上の投稿の文章内で文末が句点以外で締められる割合を求めた一方図 2 の「C」は 50 文字未満の投稿のうち文末が句点以外で締められる投稿の割合を示している。換言すると前者はひとつの投稿に注目した割合で、後者は収集した投稿すべてに注目した割合となっている。そのため両者を比較対象にすることはできない。そこで各年 50 文字以上の投稿を 25 個ずつ調査したなかで文末が全て句点以外で締められる投稿の個数を計数した。すると下の図 4 のようになる。多少のばらつきはあるもののたしかな増加傾向がみられる。図 2 の「C」=「50 文字未満の投稿 50 個当たりの文末が句点以外の投稿の割合」と比較しても割合の高さは違うが同じ傾向を示している。ここから文字数関係なく X 投稿文での句点の使用率は年々減少していることがわかる。

前述の内容を整理すると、句点の使用率が下がっている理由は SNS 投稿という行為の習慣化とそれによる「つぶやき」としての役割の浸透だと考えられる。SNS に限ったことではなく例えば携帯や車の機能、文房具に至るまでの世の中のほとんどのものがいかに利便性を向上させられるかという目的のもと変化が加えられる。換言するといかに楽をできるかであり、この考え無くしては技術の進化は無い。そして同じことが SNS の投稿文にも当てはめることができ、多くの人々が一日に何度も繰り返す行為を簡略化させた結果が句点の省略という形で一部現れたのだろう。裏を返せばカジュアルな文章にするために省かれただけではあるが、日常的に SNS で句点を目にする機会が減ると逆に句点がついている投稿への違和感を強めることになる。

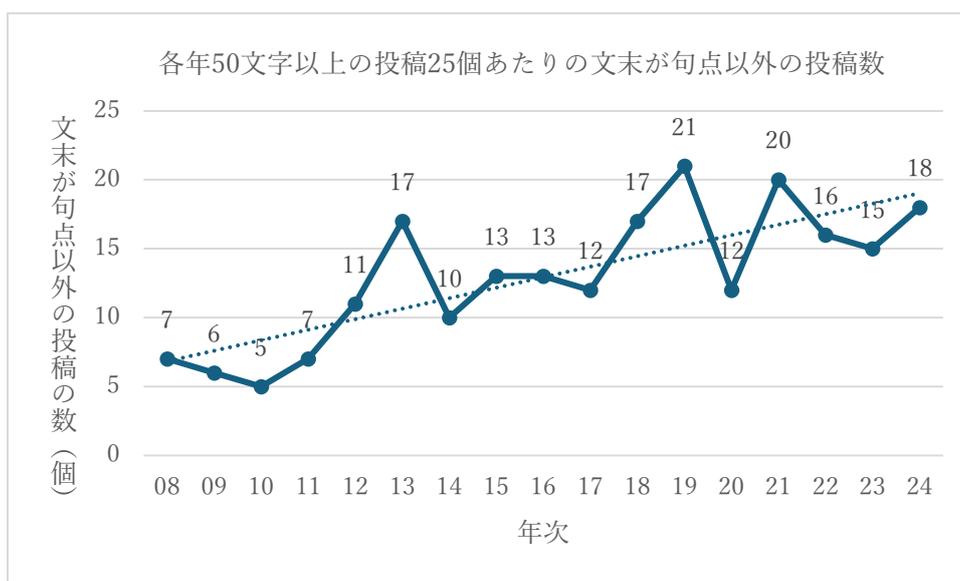


図 4 各年 25 投稿当たりの文末が句点以外の投稿の割合

図 1 に話を戻すと、「A (50 文字以上の投稿のなかで文末が句点以外で締められる割合平均)」で示された傾向のように文末で句点が用いられない割合が増加していることは確かである。ただ一定数は句点がしっかりと付き、文章として整えられた投稿も数多くみられた。しかしそういった投稿には高い割合で共通項があった。それは、そのアカウントを運用している人の年代が比較的高いということだ。前述したような特徴の投稿をしているアカウントのプロフィール欄では自身の趣味を嗜む写真や自己紹介文に年齢を記しているものが多くあり、今回の共通項を見出すに至った。また、文末に句点のみを付す以外にも絵文字や顔文字、長音符のあとに句点を付すという使用例もみられた。

今回の調査では SNS の匿名性が高いという特性上年齢に焦点を当てることができなかったが、投稿している人の年齢によっても句点を付すか否かに差が出てくる可能性が高く今後の調査課題になるだろう。

4. 3. 2 LINE 調査について

次に X などの SNS 投稿文ではなく会話文での句読点の使用傾向を知るために LINE で同様に行った調査結果を記述する。この調査では調査対象者の年齢がわかるため、先の SNS 調査で残った課題への直接的な回答とまではならないものの、年代別での句読点使用傾向の変化を見るには十分だろう。表内調査項目の「文末」とは各人から送られてきた 20 個の LINE のうち文末が登場した回数を表し、「句点ナシ」はそのうち句点が付されていない文末の回数、「その他」は文末で句点以外が登場した回数、最後に「割合」とは文末の総数のうち句点がなかった回数（「文末」/「句点ナシ」*100）である

表 2 LINE での会話文調査の結果

	年齢	文末	句点ナシ	その他	「その他」の種類	割合
A	21	21	21	5	読点、絵文字	100%
B	22	21	21	8	笑、感嘆符	100%
C	22	20	20	0		100%
D	22	25	25	15	感嘆符、笑	100%
E	22	22	22	9	感嘆符	100%
F	22	22	22	19	絵文字、感嘆符、「…」	100%
G	22	26	26	24	感嘆符、笑	100%
H	23	33	33	0		100%
I	23	21	21	0		100%
J	25	20	20	7	長音符、感嘆符	100%
K	52	41	25	13	空白、感嘆符、絵文字	61%
L	54	20	19	0		95%
M	55	23	20	9	絵文字、感嘆符	87%
N	78	58	49	43	読点、絵文字、感嘆符	84%
O	84	51	35	33	絵文字	69%

全体的に文末に句点を付さない割合は非常に高く、20代の調査対象者10名は全員メッセージに句点を100%付していないことがわかった。若年層と高年層にて明確に違いが表れたことは非常に興味深い。若年層のほうがより若い時期から打ちことばを扱い、慣れ親しんだ期間が長い分LINEなどのメッセージの送信ごとに意図的に文章の区切りを視覚化できる媒体において句点の必要性を排除していると考えられる。高年層の特徴としては一つのメッセージで送信してくる文量が多い傾向にあり、それらを区切る必要があるため一定数句点の使用があった。

一方若年層は一つひとつのメッセージが短く、さながら話しことばのような細かい応答を繰り返して会話がすすめられる傾向が強いため句点が用いられなかった。また、金田(2023)の先行研究でもふれられたように句点の「文の終止表す」という規範が無意識にも会話文での距離感を感じさせ、使用が低迷しているのだろう。

若年層と高年層の文章の打ち方には上記のような違いがみられ、前者は話しことばを大方そのまま打ちことばに変換しているのに対し、後者は書きことばを置き換えているように見受けられた。当然言語コミュニケーション方法が変わると相手に与える印象も異なるため、そういった世代間のオンライン上でのコミュニケーションの認識の差がマルハラなどの新用語を作り出す要因の一つになったと考えられる。読点の使用に関しては全体的に読点を使うほどもない短い文章でメッセージが作成されていたため、ほぼ使用がなかった。ただ文節を区切る為ではなく文末句点の代わりとして読点が用いられるケースが散見された。

この章で得られた結論を以下に簡単にまとめる。

〈SNS 調査について〉

- ・文字数関係なく文末句点の数は減少している。
特に短文投稿では非常に高い割合で文末句点がない。
- ・文末無標は毎年一定数の使用を保っている。即ち「あえて何もつけない」という選択肢として重要なものである。
- ・その他の使用数は増加している。

〈LINE 調査について〉

- ・20代の若年層に句点の使用が全くない。
- ・若年層は1メッセージが短く、高年層は長い傾向にある。
- ・若年層は話しことばを、高年層は書きことばを打ち言葉に変換している可能性がある。

4.4 句読点に対する意識について

ここではアンケート調査の結果をもとに具体的にどのような認識が句読点にされているのかについて深める。

これから下に挙げる図5はアンケートの【1】1.1の①～③の結果を、図6は1.2の①～③の結果を示している。【1】は主に文末句点の多少の差による印象変化を問う問題である。1.1ではサークルの団長から送られてきた事務的な報告文を想定した文章を提示した。1.2は友人から送られてきたメッセージを想定した文章となっている。それぞれの質問文の要旨は次のとおりである。

表3 【1】1.1及び1.2の質問文要旨

【1】1.1	質問文要旨
①	すべての文末に句点アリ
②	最終文末のみ句点ナシ
③	すべての文末に句点ナシ
【1】1.2	質問文要旨
①	すべての文末に句点アリ
②	最終文末のみ句点アリ
③	すべての文末に句点ナシ

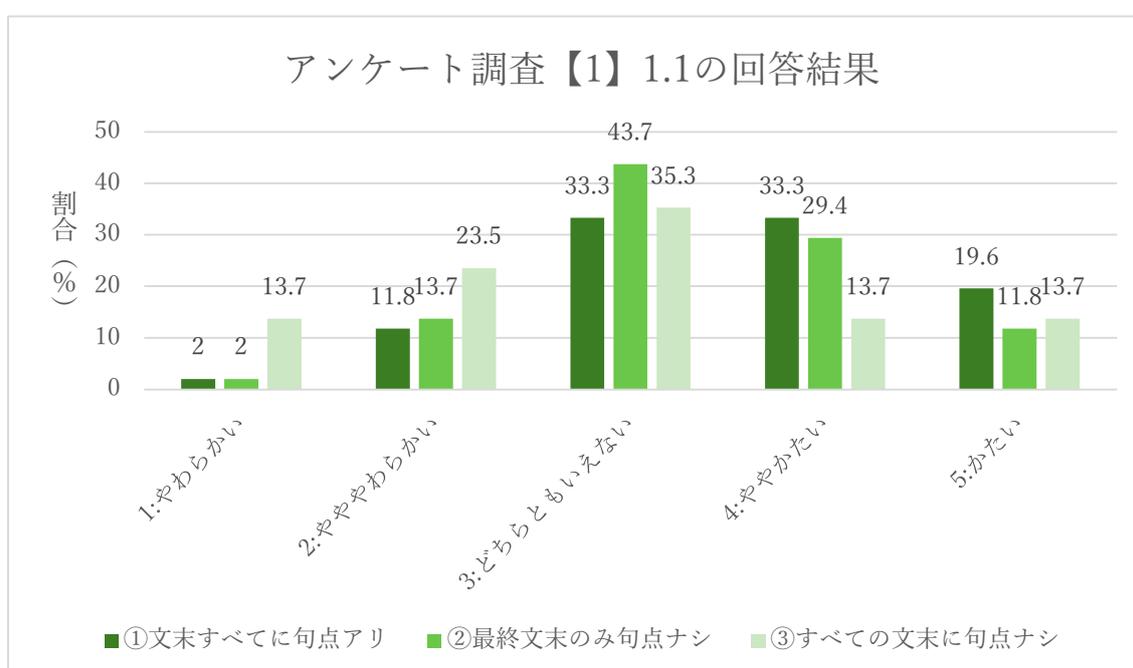


図5 【1】1.1①～③の回答

まず 1.1 について、文末すべてに句点を付した①、最後の文末のみ句点を省いた②、そしてすべての文末から句点を省いた③のいずれの項目も最も中庸的な回答である「3」に回答が集まっている。そのため傾向を見るためにもそれ以外への回答の集まり方に注目してみたい。

数値の特徴のみに注目すると、句点が最も多い①では「4：ややかたい」から「5：かたい」に集中している。他の②、③に比べても高い割合となっている。最終文末のみ句点を省いた②については、①にも勝らずとも「4：ややかたい」において最も高い数値が出ている。この二者①、②において注目したいのは「1：やわらかい」と回答した人がそれぞれ一人しかいないということだ。補足として①に「1：やわらかい」と回答した人と②に「1：やわらかい」と回答した人は別の人物であり、年代も離れていた。そして最後の③「すべての文末から句点を省いたもの」について「2：やややわらかい」が最も多く、「1：やわらかい」においても他2つの文章と差をつけている。

数値の特徴は上記の通りである。それぞれの特徴を端的に換言すると①が「かたい」印象側に傾き、②は「ややかたい」ほうへ、そして③は「やわらかい」側だった。しかし例外の回答も多くある。特に注目したいのは文末すべてに句点を付している①の文章に「やわらかい」と回答した例と、すべての文末から句点を省いた③に「かたい」と回答した例だ。①の文章を「やわらかい」とした方の年齢は60代であり、他の回答をみると非常に興味深い結果となっていた。②は「どちらとも言えない」、③は「かたい」を選択していた。またほかに③に「かたい」、「ややかたい」と回答していた人の結果を参照すると半数以上の人三つの問いすべてに「かたい」、「ややかたい」と回答していた。これらの回答の傾向から文章の印象を特に句点に依存していない群であることがわかる。

また①に「やややわらかい」、「やわらかい」と回答した人達にも②、③に「かたい」、「ややかたい」と答えた人が多く、句点がついている文章よりついていないほうがかたい印象を受けていることがわかった。また特に一定の年代に共通してみられる特徴というものはない。全体の傾向としては文末に句点が付されていない③の文章にやわらかい印象をもたれやすくその逆の①、②にかたい印象が集中することがわかったが、句点に依存しない人や真逆の印象をもつ人も少数ながらも一定数存在する。

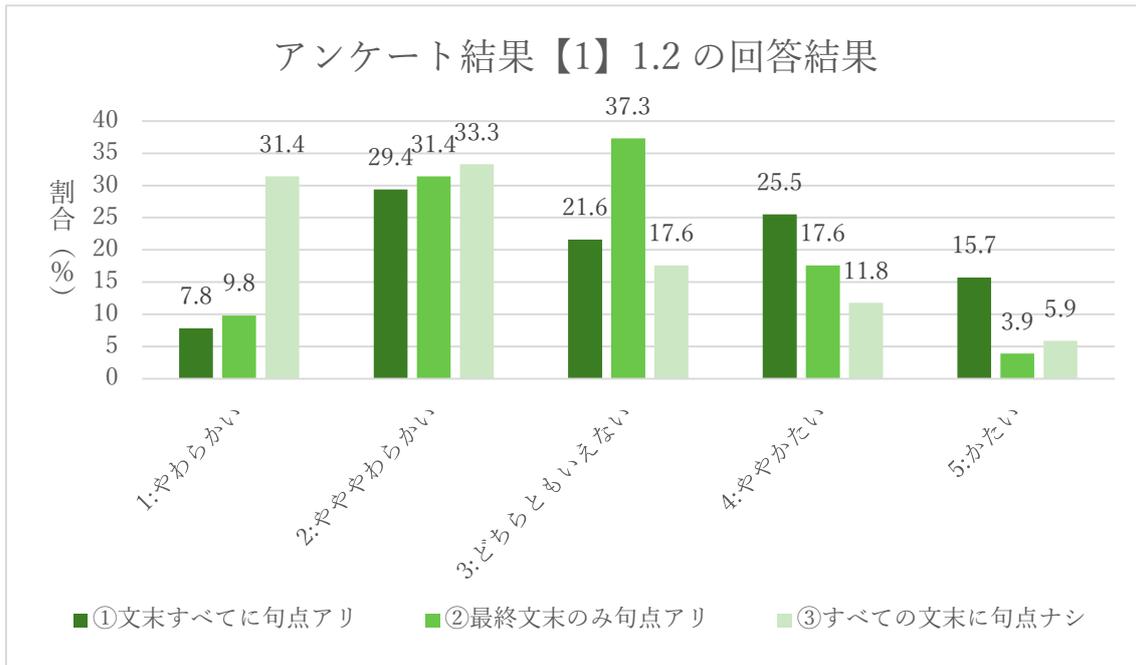


図6 【1】 1.2 ①～③の回答

次に【1】 1.2 について、こちらの問いでは 1.1 とは違い、①と③において中庸的な「3」が最も高くなる結果ではなかった。また、句点が一番多い①で最も多かった回答が「2: やややわらかい」であることも非常に興味深い。文章全体の印象は句点の数よりも、どの部分に付されているかによって変化する可能性がある。

この問いの文章は友人に向けた文章を想定しており①～③共通してカジュアルな印象が強い文章だった。そのため「やややわらかい」に①～③の回答が集中しているのだと考えられる。その中でも「やわらかい」にて句点なしの文章の③が突出しているのは句点は一切なく途切れない文章がよりカジュアルな印象をもたらしたのだろう。

また【1】 1.2 の文章は【1】 1.1 のやや定型的な報告文とは違い会話体に近いためそういった点で句点のない文章になじみがあったのではないだろうか。ここでも例外に注目しておく。特に③の問いに「かたい」、「ややかたい」と回答した人は先ほど同様ほぼすべて同じの回答（「かたい」または「ややかたい」）か①にて「やややわらかい」、「やわらかい」と回答していた。また【1】 1.1 の回答と比較するとほぼ同じ人物であることがわかった。ここから結論としては【1】 1.1 と同じく一定の同じ層は文の印象を句点に依存していない、または逆の印象を抱くということが言える。

また「句点の数より位置で印象が変化する」可能性について、今回の結果だけをみても断言することはできない。ただ少なくとも会話体においては文末に句点がない文章のほうがよりやわらかい印象を与えやすいことがわかった。

次は【2】 ①～④の回答結果を示した図である。質問文の要旨は次のとおりである。

表4 【2】①～④の質問文要旨

【2】	質問文要旨
①	句点で締められる文の印象を問う問題
②	回答者自身がメールやLINE、SNSのDM上で文末に句点を付す頻度を問う問題
③	②で挙げた媒体でのその他（絵文字、感嘆符等）の使用頻度を問う問題
④	文末句点の省略やその他への置き換えに対する抵抗の有無を問う問題

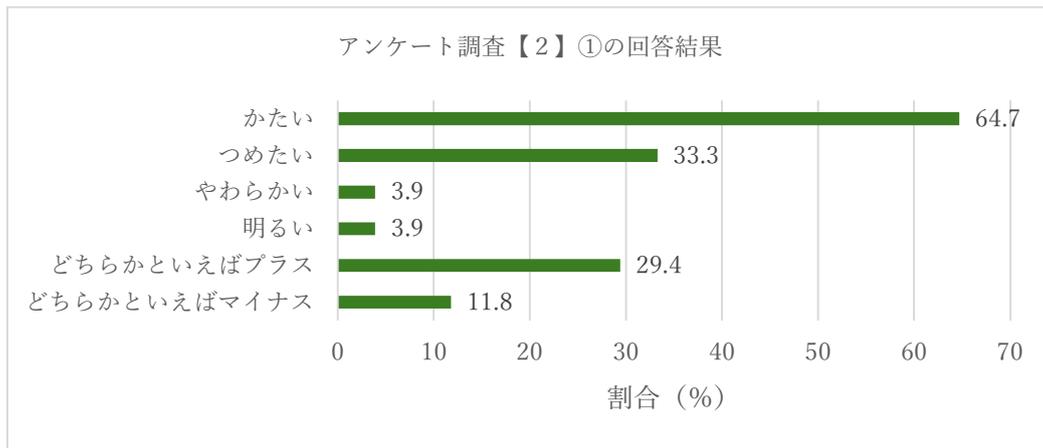


図7 【2】①の回答

【2】①は句点で締められる文の印象を問う問題となっており、回答についてはまず全体的に「かたい、つめたい」という回答がその正反対の印象である「やわらかい、明るい」を大きく上回る結果となった。しかし「かたい、つめたい」というマイナス寄りの印象の回答が多い一方で「どちらかといえばプラス」の回答が多くなっている。

考えられる理由は、それぞれの形容詞の印象をそのまま「かたい、つめたい」＝マイナス、「やわらかい、明るい」＝プラスと捉えるのではなく、即ち文章の形容詞ではなく文章自体の印象で捉えているためだろう。より具体的に述べると、「プラス」は句点のついた文章に丁寧や読みやすいといった印象をもっているという意である。実際に「その他」において設けていた自由記述欄では「キチンとしている印象」、「丁寧、誠実、よそよそしい」、「句読点がないとひたすら読みにくいから、かたい・やわらかい以前に嫌い」等の声があがっている。そのため句点で締められる文章は総合的に端粛な印象が強いと考えられる。

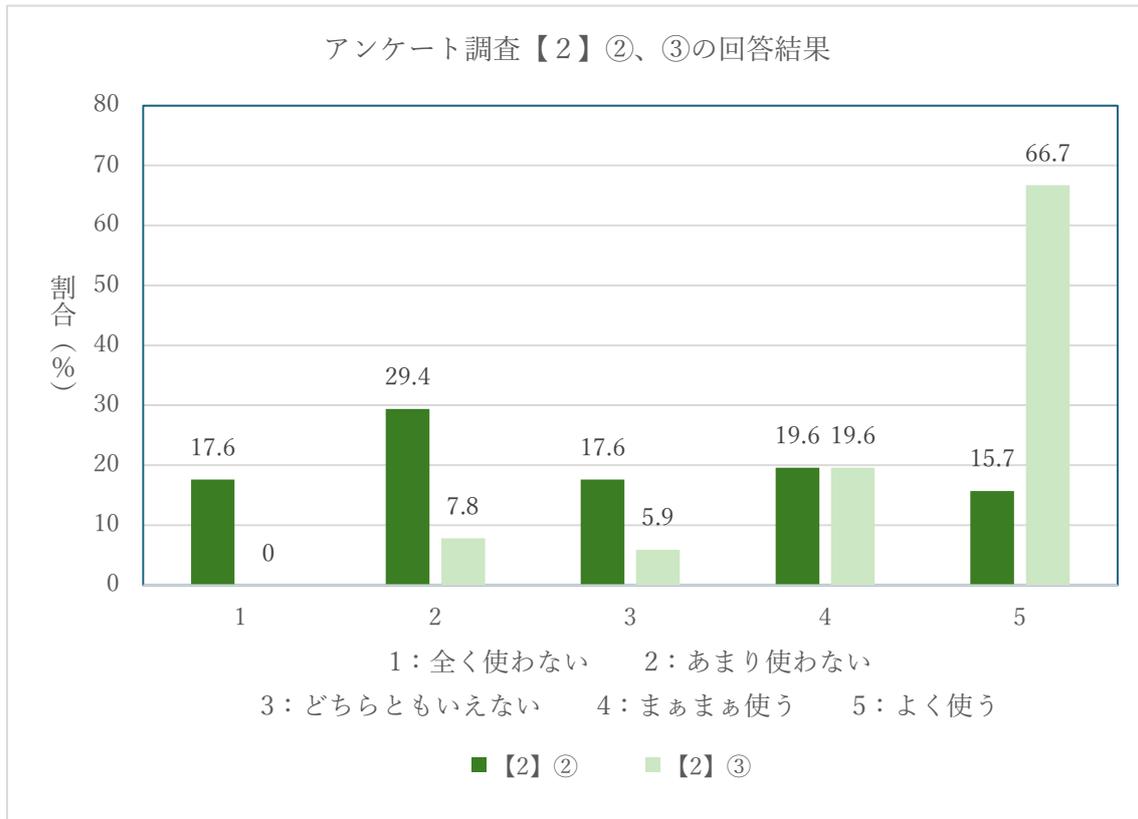


図8 【2】②、③の回答

【2】②は回答者自身がメールやLINE、SNS上で文末に句点を付す頻度を問う問題である。先の【1】と他の【2】の問いすべて、年代による回答の偏りは一切みられなかったがこの②の回答ではある特徴がみられた。今回のアンケート調査には50代以上の回答者が計10名おり、句点を「よく使う」と回答した合計人数が8名のなか50代以上が6名を占め、「まあまあ使う」も含めると計8名がこの二つの回答範囲に集中していた。ほかの問いでは年齢による偏りがみられなかったため、句点に対する印象とは関係なく文末には高年層のほうが句点を付しやすいということがわかった。これは先のLINE調査の結果と整合性がある。

「まあまあ使う」「よく使う」の回答には20代以上の回答者も多く、二項目合わせて18回答中10名がそうだった。しかしLINE調査では同じ若年層の20代は全く句点の使用がなかった。たしかに句点の使用には個人差がある。しかし、メールやLINE、SNSで句点を「よく使う」という回答とLINE調査での若年世代の強い使用傾向との乖離を個人差で片づけてしまうのは少々強引だ。考えられる仮説は、日常では無意識に句点の使用が少ないが今回問題文として言語化されたことで限定的な句点の使用に意識が集中した可能性がある。

続いて【2】③は同じくメールやLINE、SNSでのその他（絵文字、感嘆符等）の使用頻

度を問うものとなっており、その回答について、これは圧倒的に「よく使う」の回答が多かった。また、「全く使わない」人が一名もいないのは興味深い。年代の内訳を見ても特に偏りはなかった。そのため全年代において、日常的な文字のやり取りの中で文末での絵文字や感嘆符の使用は広がっているといえる。

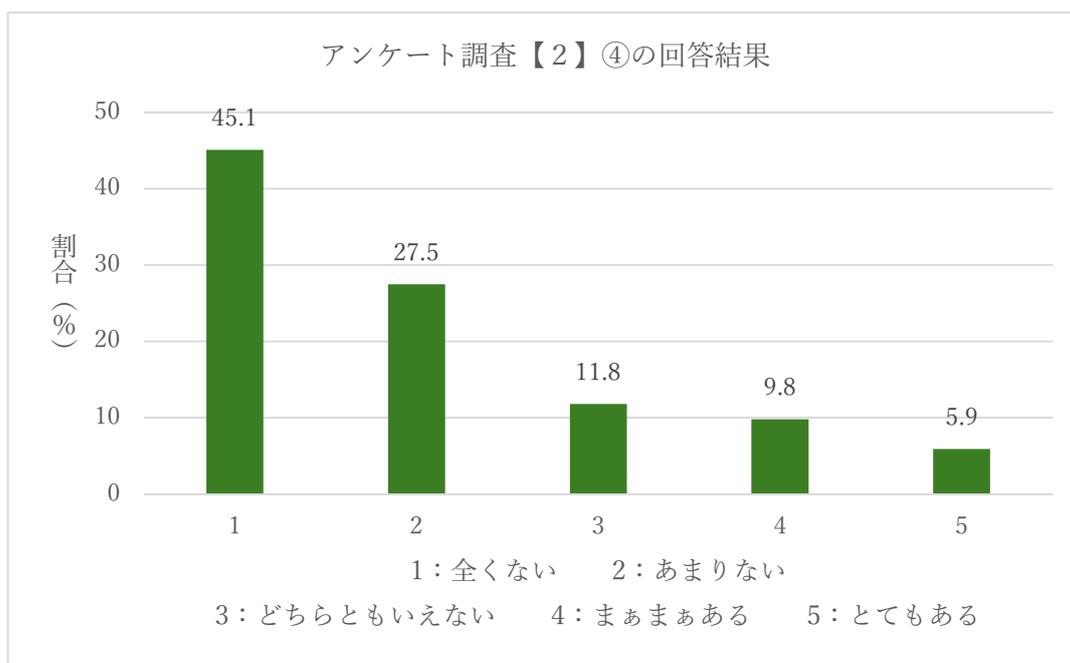


図9 【2】④の回答

それと比例して、文末句点の省略やその他への置き換えに対する抵抗の有無を問う【2】④でも抵抗を持たない人の割合が高くなっている。また抵抗が「あまりない」、「全くない」と回答した人のほぼ全員が【2】③の回答において文末に絵文字等を「まあまあ使う」「よく使う」を選択しており、その回答には一貫性があった。

これらのアンケート調査を通して、句点の有無に依存しない集団も確認したが全体的にみると句点がない文章のほうがやわらかい印象を与えやすいことがわかった。また、句点の数よりも、文末に句点があるか否かのほうが印象には大きく干渉する可能性が高い。先のSNS調査での文末が無標かその他のものかという話題やLINEの会話文調査にて若年層を中心に文末が無標の割合が非常に高いことを総合して考えると、主に若年世代を中心として文章上で自身の感情表現を円滑に行うことをたすける役割で絵文字や無標を選択している可能性が高い。

また絵文字に比べ文末に何も付さない無標という選択肢が多く取られる理由は入力の手間を省くことによる手軽さやそもそも投稿やメッセージの送信ごとに文章が区切られるため句読点の必要性自体がなくなっているからだろう。しかし、それよりも余計な感情を文章に付加しないという役割が強いと考えられる。ただ既知のとおり絵文字だけでも数多く

の種類が存在し、感嘆符や疑問符、その他の記号を含めると文末表現の幅はかなりのものである。そういった表現の選択肢が多いことは文末が打ちことばにおいてかなり重要な位置づけがなされている証拠だろう。そのなかで傾向として端粛な印象が強い句点を文末に付すことは文字のみで自身の意図を正しく伝える場において得策ではないのだろう。

5. おわりに

本研究は、SNS や LINE などオンライン上での句読点の使用の低迷に注目して区切り符号としての句読点の実際の使用傾向や人々の持つ印象を明らかにすることを目的とした。それらを明らかにするために X を用いた投稿文字数ごとの文末句点やその他の使用割合調査や、SNS 投稿文とは違う LINE の会話文の調査、そして具体的な印象を知るためのアンケート調査を行った。結果を以下に整理する。

① SNS 調査

文字数関係なく文末句点の使用は年々減少傾向にある。特に文字数の少ない場合は非常に高い割合で文末が句点も符号もない状態の無標かその他のものであった。

② LINE 調査

高年層には句点の使用があるが若年層は全く使用していないという顕著な結果が出た。また、メッセージひとつの長さなどから高年層は書きことばを、若年層は話しことばをそのまま打ちことばに落とし込む傾向にあるため認識にギャップが発生していると考えられる。そして SNS と LINE 調査の二つの結果から文末に使用される記号や符号の多様さが伺え、打ちことばの文末は書き手の感情や会話全体の印象を決定づけるのに重要な役割を担っていることがわかった。

③ アンケート調査

文末句点のない文章は比較的やわらかい印象を与え、高年層ほど文末句点を使用する意識があることがわかった。こういった句点の特性と世代間での打ちことばのギャップが合わさって冒頭で取り上げた「マルハラ」という概念が広まるに至ったのだろう。

本研究は主に二種類の SNS 媒体を対象とした調査とアンケート調査を行い、十数年単位での文末記号の経年変化や世代間での明らかな使用率の差異を明らかにすることができた。文章に記録としての役割だけでなく会話として感情を正しく伝達する役割が時代の変化によって新しく付与されたことで、絵文字や感嘆符に限らず句点や無標までもがそういった役割に活用されている。

今回調査を行ったなかでは、句点には標準的な用法と SNS や LINE 上での使われ方との間に差が認められたが、読点にはそれほどの違いは認められなかった。また「4.3 SNS での使用傾向について」では句点の使用が全くない投稿数が初期と後期で3倍の差がついており読点には変化があまり見られなかったと述べた。しかし句点ほどの変化ではないものの読点も使用数自体は確かに減少していた。ではなぜ句点のほうが大きな変化がみられたのかを考えると、投稿やメッセージごとで視覚的に文の終わりを示すことが可能になった以上、文節を区切る読点より一般認識として文末を区切るものである句点のほうが必要性がなくなったからだろう。このことが後にも述べる句読点の正書法的立場の強調に拍車をかけ、より使用が減ったと考えられる。また句点の代わりに文末に読点が用いられるケースも多かった。そのことも読点の使用数が句点ほど減少しなかった理由のひとつと言え、また代替として使われるということは現時点では句点ほど「かたい」印象が薄いまたは特に印象をもたれていないことがわかる。

ただ先述のとおり両者の使用数はともに減少している。SNS や LINE は自分と相手の間の上下関係を考慮する必要がほとんどないため人々はプライベートなモードで気軽に言葉を交わすことができる。そして絵文字や無標、感嘆符、3点リーダー「…」などの使用でより多様な文章表現が可能であり、カジュアルなモードも相まって句読点を付けないことが通例に近くなってきている。その環境がより一層句読点は学校の課題や職場での目上の人へのメール、公的な文書などのかしこまった場面で使うものという正書法的立場を強めているのだろう。そのためオンラインでのやりとりにおいて絵文字など他にも多くのもので表すことができた文末にあえて句読点を使用されるとプライベートモードと外向きのモードの間で齟齬が生じてしまう。

句読点を使わないこと、即ち絵文字や無標などの選択を取ることこそが内と外のモード切り替えのサインであり、その認識をもって使い分けができていくか否かが打ちことばでは重要になっている。そこから使用のある投稿やメッセージには外向きの公的なモードが適用され、本来多くの人にとってプライベートなモードであるはずの SNS や LINE にそれらが現れると違和感や威圧感が発生するのだろう。

文末句点の使用は現在の調査時点では年々減少を続けている。今後数十年先では使用が全くなくなるのか、また読点も同じようにこれから正書法的立ち位置を強め使用が減少するのかに注目したい。

参考文献

- ・大類雅敏(1979)『句読点活用字典』、栄光出版社
- ・飛田良文(2002)『現代日本語講座 第6巻 文字・日本語表記』、明治書院
- ・駒田登紀子(2003)「十九世紀フランスにおける句読点をめぐる状況とフロベール『感情教育』の括弧と複声のエクリチュール」、『仏文研究』、34、pp.37-55
- ・水谷智洋(2009)『LEXICON LATINO-JAPONICUM Editio Emendata 羅和辞典〈改訂版〉』、研究社
- ・岡田和子(2011)「幕末の日本開国前後における西洋語・文化の需要とその影響」『フランス語学研究』45(1)、pp.116-119
- ・矢田勉(2011)「表記体間の鑑賞と新表記体の創出—候文の成立に対する仮名文書の関与について—」『文学』12(3)、pp.76-91
- ・鈴木広光(2015)『日本語活字印刷史』、名古屋大学出版会
- ・坂井晶子(2018)「明治・大正期の初等教育における句読法 —作文教育を中心に—」『日本語の研究』14(2)、pp.84-100
- ・平雅行、横田冬彦、福永伸哉、吉川敏子、早島大祐、三宅正浩、村田路人、小林啓治、安岡健一、三原康之、高橋傑、松本和也、齋藤悦正、水村暁人、山田耕太(2023)『日本史探求』、実教出版
- ・金田拓(2023)「文末句点「。」を伴う文は、若年者に距離を感じさせるか? 日本語打ちことばの研究」『帝京科学大学総合教育センター紀要 総合学術研究』6、pp.19-26
- ・宮崎由美(2023)「「句点」の文末使用の経年変化:加藤安彦ケータイメールコーパスの整備を通して」『専修国文』112、pp.1-15
- ・岩崎拓也、市江愛、井上雄太(2024)「チャットにおける符号使用の印象評価のための予備的分析」『言語資源ワークショップ発表論文集』1、pp.431-441
- ・矢田勉(1999)「候文における倒置記法の簡略化とその原理」『白百合女子大学研究紀要』35、pp.91-113、

参考 URL

- ・『日本国語大辞典』
([JapanKnowledge, https://japanknowledge.com](https://japanknowledge.com))
(最終閲覧日：2024-11-23)
- ・文末の句点に恐怖心…若者が感じる「マルハラスメント」 SNS 時代の対処法は、産経新聞、2024-02-06、産経ニュース
(<https://www.sankei.com/article/20240206-YWJICX4DSBEP3HMZ6SJD63PGNM/>)
(最終閲覧日：2025-01-08)
- ・文化庁文化審議会国語分科会
(<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/>)
(最終閲覧日：2025-01-28)
- ・文化審議会国語分科会（2021）『新しい「公用文作成の要領」にむけて（報告）』、文化庁
(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/92968501_01.pdf)
(最終閲覧日：2025-01-28)
- ・“X”
(<https://twitter.com/>)
(最終閲覧日：2025-01-28)
- ・“Google Colab”
(<https://colab.research.google.com/>)
(最終閲覧日：2025-01-29)
- ・“ChatGPT”
(<https://chatgpt.com/>)
(最終閲覧日：2025-01-29)

謝辞

卒業論文の執筆にあたって、アンケート調査にご参加及びその拡散にご協力いただいた皆様にこの場を借りて深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。